

資料報告 山王平遺跡出土の追加石器資料について

長澤 有史

はじめに

山王平遺跡は相模原市中央区淵野辺本町に位置する旧石器時代と縄文時代の複合遺跡である。平成6年2月～12月にかけてマンション建設工事に伴い発掘調査が行われ、その結果、旧石器時代の文化層4枚、礫群21基、縄文時代中期後葉の住居址57軒、掘立柱建物5軒、屋外埋設土器3基、土坑109基などが検出された（戸田・麻生ほか1998、麻生・相原2021）。

本稿では、追加の石器9点を報告する。なお、石器の器種分類、石材鑑定、石器実測・トレースは長澤によるものである。

1. 山王平遺跡の概要

山王平遺跡はJR横浜線淵野辺駅の北西約1kmに位置している。境川の右岸にある段丘上に立地し、標高は113m、境川との比高差は約12mを測る。遺跡が形成された段丘は相模原面であり、市域では最も早く離水した段丘面で約9万年前に離水したものと考えられている（町田2009）。橋本遺跡（金山・土井ほか1984）、古淵B遺跡（関塚・松井ほか1990、河本・川本ほか2005）では市内で最も古い時期に遺跡が形成されたことが明らかになっている。北西約100mに境川が流れており、遺跡周辺は宅地が著しい。調査区内には低位段丘面と高位段丘面に区分でき、本格調査に先行した試掘調査では、崖線を含む高位段丘面に遺跡が分布していることが把握された（戸田・麻生ほか1998、第1図）。以下に旧石器時代と縄文時代の概要を示す。

旧石器時代の調査区は第1～3区が設定され、第Ⅰ～第Ⅳ文化層まで確認され、出土石器点数は全文化層を合計すると1,220点を数える（麻生・相原前掲、第1図）。各文化層の出土層位や石器群の様相から以下に位置づけられた。第Ⅰ文化層：相模野第Ⅳ期後半（鈴木・矢島1987）・段階Ⅶ（諏訪間1998）、第Ⅱ文化層：相模野第Ⅳ期前半・段階Ⅵ、第Ⅲ文化層：相模野第Ⅲ期・段階Ⅴ。第Ⅳ文化層：相模野第Ⅲ期・段階Ⅴ。特に石器の出土点数が多いのはB1層上部で確認された第Ⅰ文化層で、石器ブロック17か所、礫群21か所が見つかり、出土石器

の総数は1,057点を数える。主な石器器種は尖頭器32点、ナイフ形石器45点、スクレイパー18点などであり、特筆されるのは石核39点、敲石17点、剥片類780点と遺跡内での集中的な剥片剥離がうかがえる。先述したように調査区が3つに分けられており、開発深度との兼ね合いにより、各文化層を完全に掘り抜くことができておらず、未調査部分や部分的な調査で終了した点があることが指摘されている。（麻生・相原前掲）

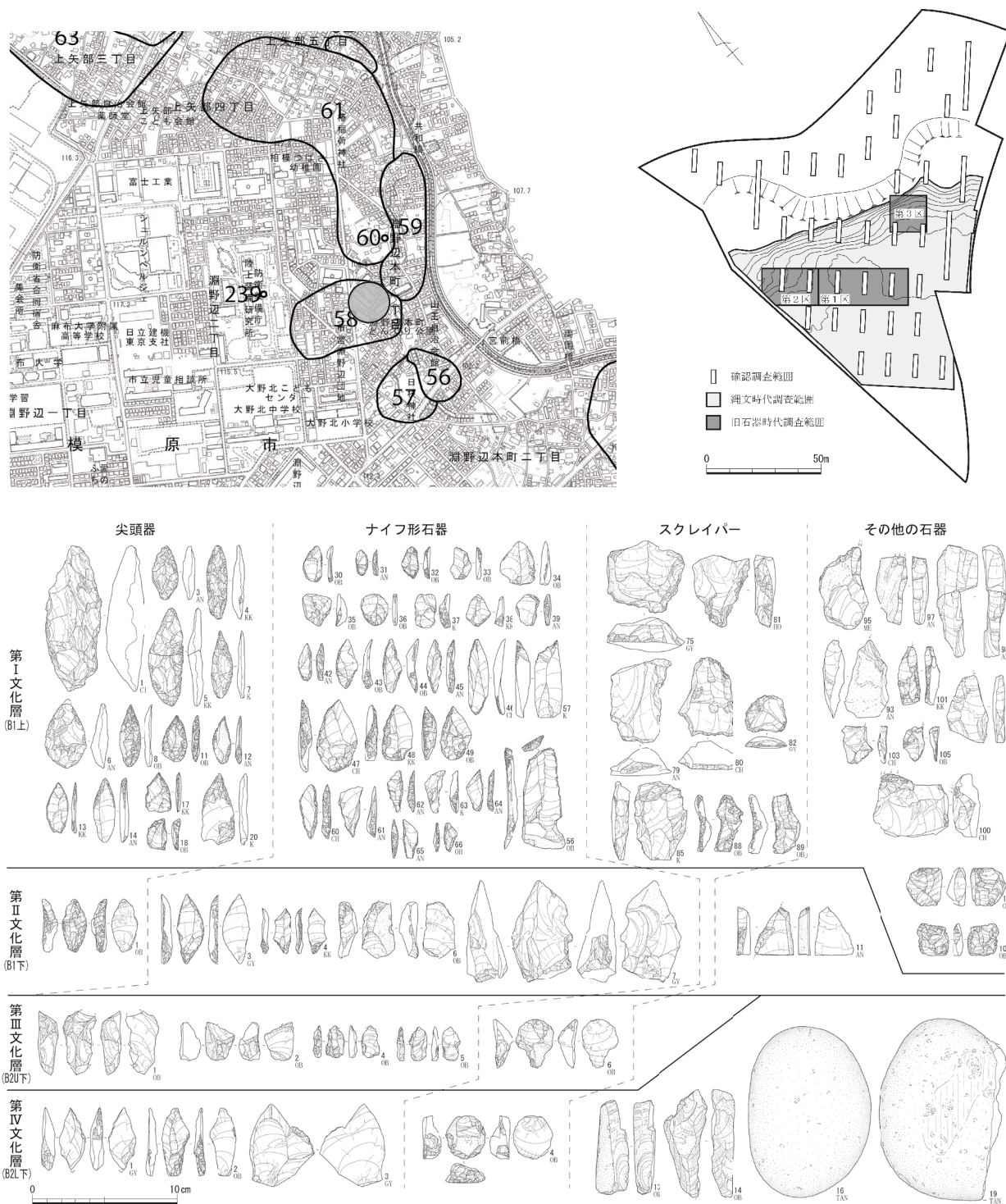
縄文時代では中期の集落址が形成されており、中央に墓地と推測される土坑群があり、その外周部に住居址が環状に展開している（第2図）。約半分が北東の調査区外に位置しており、その全容は不明であるが、約100軒の住居址群があったものと推測される。台地の平坦面が北東に伸びる点から、やや細長い環状構造が推測されている（山本2012）。住居址の時期について、中期後葉の加曽利E式期が主体であり、中期中葉の勝坂式期の住居址および中期末葉以降に相当する敷石住居址などは検出されておらず、集落形成の展開は中期後葉に限定される。具体的には加曽利E式の初頭～後葉まで5つの段階が設定され、外周部から内側へ住居址の分布が縮小する傾向が指摘されている（戸田1998）。

2. 資料の整理作業経過

山王平遺跡発掘調査報告書 旧石器時代編の刊行後、令和3年11月に当館へ資料移管が行われた。その後、当館の考古収蔵庫へ納める際に、資料の再整理を実施し、資料の点箱数を圧縮していたところ、器種分類が表示されていないものが27点あり、長澤により分類したところ、そのうち9点は良好な資料と確認したため、当館研究報告にて資料報告を行うこととした。報告するにあたり、縄文時代の住居址出土のものは本報告の図版掲載石器の注記と照合し、一致することを確認した上で該当の住居址出土のものと判断した。令和5年11月から整理作業として実測・トレースを行った。

3. 資料の詳細

今回、報告する資料は尖頭器4点（未製品3点含む）、



第1図 山王平遺跡の位置と調査区、出土した旧石器時代の遺物

スクレイパー 1 点、加工痕のある剥片 1 点、石核 1 点、剥片 2 点である (第3～7図、第1表)。それぞれ出土地点の情報をもとにまとめると、表土採集: 尖頭器 3 点 (う

ち未製品 2 点)、縄文時代住居址出土: 尖頭器未製品 1 点、スクレイパー 1 点、加工痕のある剥片 1 点、剥片 1 点、石核 1 点、出土地不明: 剥片 1 点である (第3～7図、



第2図 山王平遺跡の縄文住居址

第1表)。

表土採集の石器(第3・4図、第1表)

1は尖頭器未製品である。裏面には素材面が大きく残置している。下端部には礫面が残る。このことから板状剥片が素材であったことが考えられる。打面部がなく、右側面に裏面からの折取面があることから目的とする尖頭器の幅に即した素材形成がうかがえる。表面には両側縁からの面的な剥離を加えており、中央付近まで及ぶ剥離と、周辺部付近の剥離と2つに分けることができる。周辺部の加工は側縁が強く挟れていない点から軟質なハンマーによる打撃の可能性がある。側面をみると歪みが少なく、下端部に向かうにつれ薄手になる。裏面では面的な加工が上部以外にない。また折取面に加工が加えられていないことから、尖頭器製作の障害となり、除去せずに製作を断念した可能性が高い。以上の点から尖頭器未製品と判断した。石材は安山岩である。

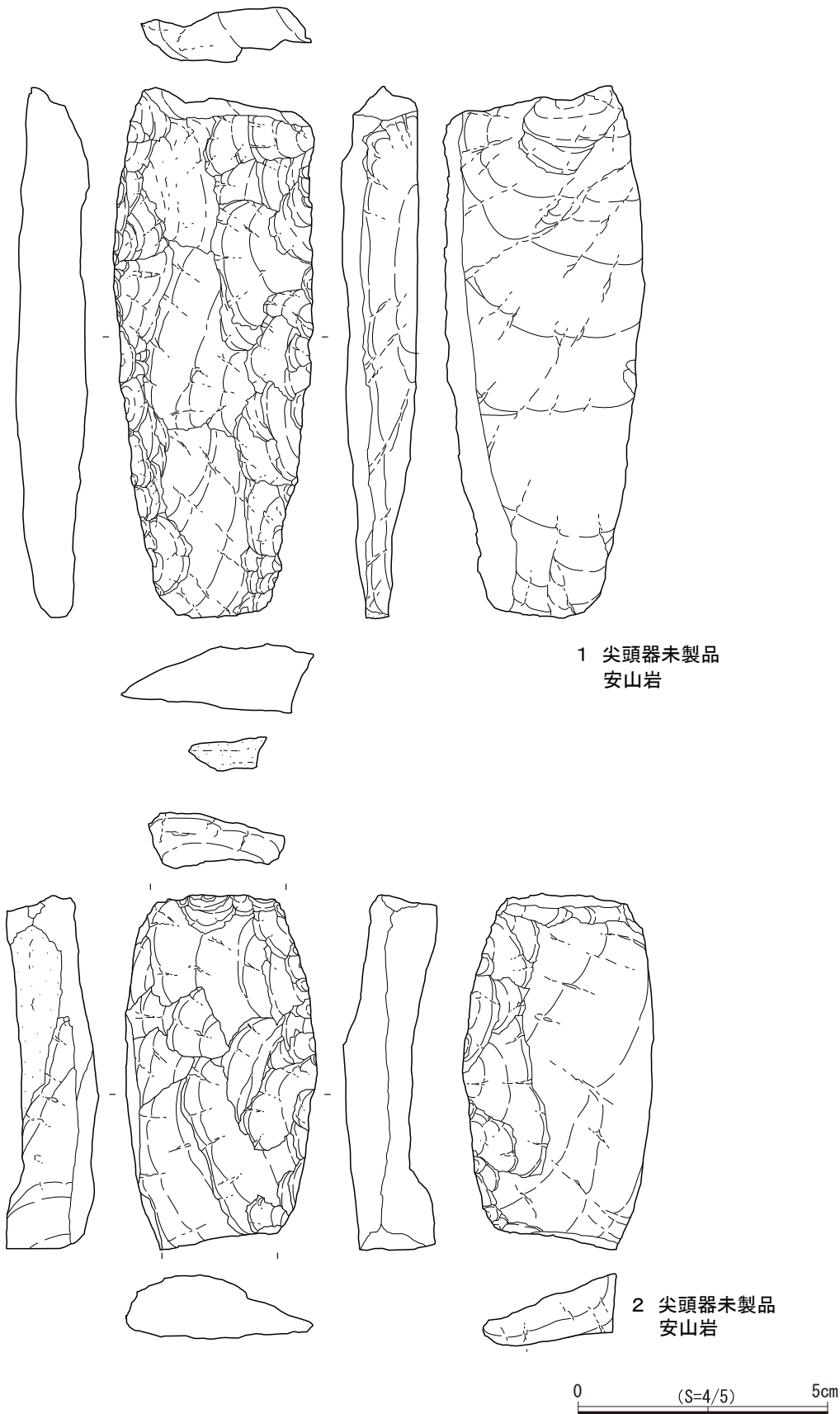
2は尖頭器未製品である。裏面に素材面が大きく残る。側面形状からやや歪んだ形状であったと考えられる。上端部は折り取られ、下端部は表面の面的な剥離を切っており製作時の折損とみられる。左側面上部には礫面残り、下からの剥離面がある。いずれも右側縁からの剥離に切られている。成形加工は右側縁から行われ、表面で

は左側縁まで到達するものと、側縁周辺のもの2つに区分できる。裏面では周辺付近のものが多く、中央部付近まで及ぶものは少ない。これは素材剥片の反りが影響している可能性がある。側面形状では下端部付近の厚みが除去できていないことが分かる。左側面が未加工であることは1の尖頭器未製品と共通する。石材は安山岩である。

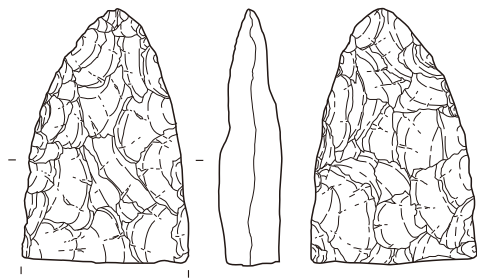
3は尖頭器である。先端部であり、丁寧な両面加工により断面凸レンズ状に仕上げられている。下端部は裏面からの加撃に折損しており、その要因は不明である。先端部がやや右に振れる形状である。両側縁からの面的な加撃により、素材面は残っていない。平面形状から両側縁があまり張らない木葉形であった可能性がある。側面形状では表面の中央付近や裏面の上半部でやや歪んでおり、器体成形時の剥離によるものと考えられる。周辺部の細かな側縁調整はそれほど多くない。石材は安山岩である。

縄文時代の住居址出土の石器(第4～6図、第1表)

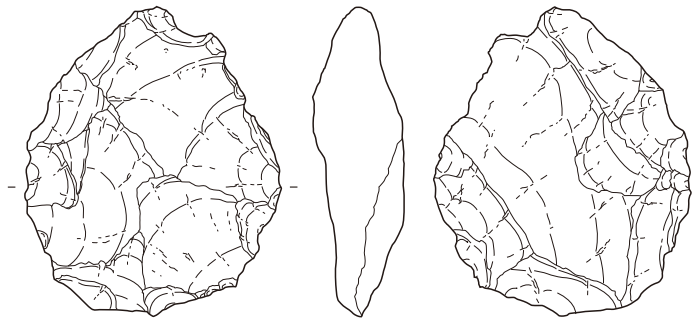
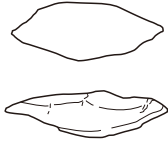
4は3号住居址のピット6から出土した尖頭器未製品である。裏面に素材面と推定される剥離面がみられる。両側縁から面的な剥離が加えられ、表面では中央部まで。及ぶ剥離があり、一部に周辺付近の剥離が確認できる。



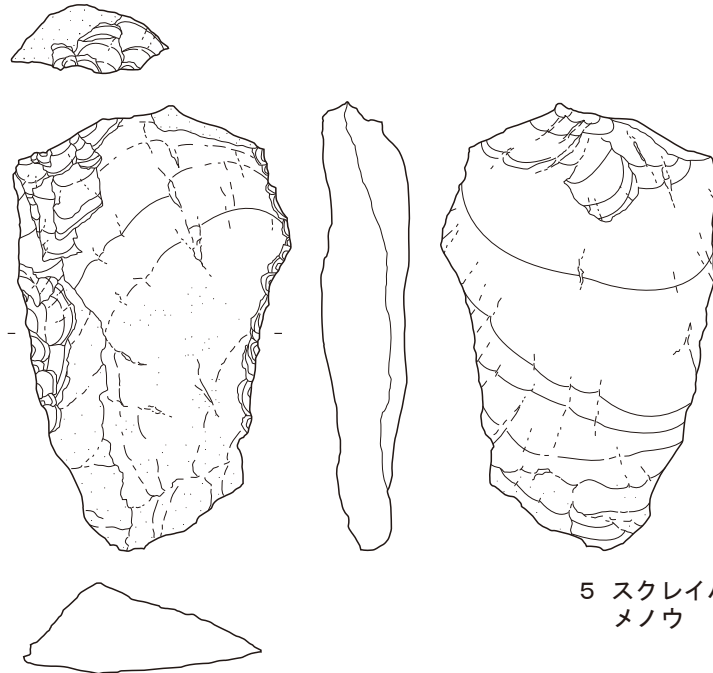
第3図 石器（表土採集）



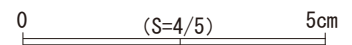
3 尖頭器 安山岩



4 尖頭器未製品
32号住居址出土
安山岩



5 スクレイパー 32号住居址出土
メノウ



第4図 石器（表土採集・縄文住居址出土）

裏面では周辺付近の剥離が主で、中央部の厚みが除去し去に差異があることが分かるが、同様に側面形状でも厚みが一定ではない。以上の点から未製品と判断した。素材剥片がやや小振りであり、厚みの除去がうまくいかずに破棄されたものと考えられる。石材は安山岩であり、1～3、7のような茶褐色ではなく黒色である。

5は32号住居址から出土したスクレイパーである。縦長剥片が素材であり、表面上端部に原礫面が、下半部には節理面および原礫面がみられる。一部原礫面が残置する複剥離面打面を持ち、打点直下には打瘤裂痕がみられる。表面の剥離面構成から90度打面転移が推測され、石核消費の初期段階での剥片剥離と考えられる。表面の上部左側には細かな調整剥離が行われているが、剥離軸とは一致しない。側面形状は末端がわずかに湾曲し、裏面の下端部にステップがみられる。表面の剥離面構成から90度打面転移が推測される。刃部調整は両側縁で異なっており、左側縁では中央部に、右側縁は上部からほぼ一側縁に施される。調整剥離は右側縁の方が小規模で連続的である。石材はメノウと推定され、部分的に縞状を呈する。旧石器時代～縄文時代において主体的に使用される石材ではない。

6は加工痕のある剥片である。縦長剥片を素材としたもので、表面左側によく水磨された円礫面が残る。単剥離面打面を持ち、打点直下には打瘤裂痕がみられる。表面の剥離面構成から打面転移は行われず、先行する剥離面と剥離方向が大きくずれない点から単設打面の石核と推測され、石核消費の初期段階での剥片剥離の可能性はある。側面形状は直線的で、末端がわずかに反る。加工は裏面に主体的に見られ、左側縁は中央部のみに、右側縁では上半部から下半部に連続的に調整加工が為されている。石材はホルンフェルスと推定され、線条に黒身を帯びる部分が部分的にみられる。前述の5と同様に旧石器時代～縄文時代において主体的に使用される石材ではない。この点は類例を集め、石材の使用時期、具体的な産地の検討などが課題である。

7は剥片である。32号住居址からの出土である。単剥離面打面であり、打瘤裂痕は見られず、5mmほどのコーンが確認でき、打点部は平坦である。表面は右側縁からの剥離と上部からの剥離により構成される。また上端部には階段状剥離が複数みられることから、幾度か加撃したのちに、本剥片が剥離されたと考えられる。右側縁や上部からの剥離により、中央に明瞭な稜線が形成され、剥片剥離が行われたと推測される。その結果、断面が強い三角形を呈し、側面形状は直線的で歪みはほぼない。なお、ローム層と推定される茶褐色土が付着している。石材は

安山岩である。

8は石核である。19号住居址からの出土である。節理面が全体的に残置しており、やや歪んだ三角柱状である。5～7mm大の球顆をまばらに含む。裏面には上部からの折取面があり、素材の分割が考えられ、元々は横長で角柱状の原石であった可能性がある。打面は上部に設定され、打面作出は横長の剥離面2枚により行われている。この剥離面を切る作業面が表面から下部にかけて確認でき、縦長剥片が剥離されている。5cm前後の剥片剥離は、上記の1枚以外にはみられない。石材は黒曜石である。透明度がかなり高く、球顆を除くと不純物はみられず、光に透かすと透明な部分と黒味がある部分が明瞭に分かり、さらに内在する球顆も視認できる。以上の点から産地は信州系と考えられる。なお、理化学的な黒曜石の産地推定は行っておらず、肉眼観察から判断した。

出土地不明の石器（第7図、第1表）

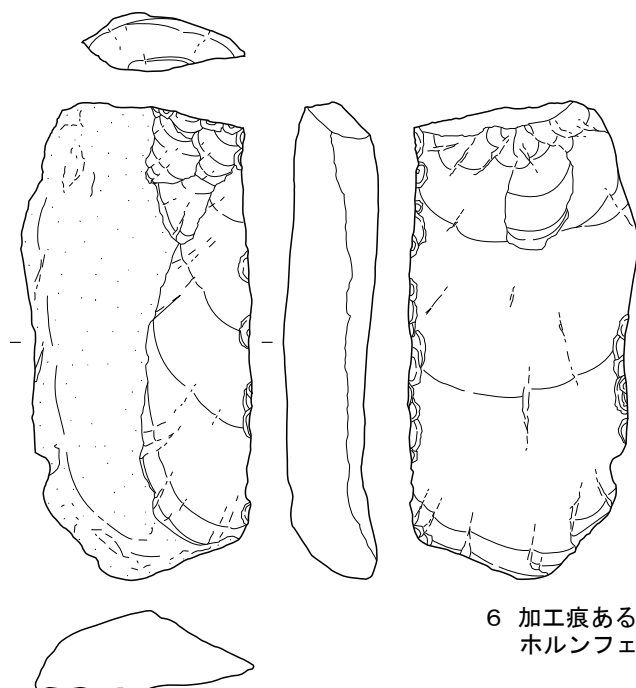
9は剥片である。注記がされているものの、かすれて判別できないものである。単剥離面打面を有し、打点部には小さな打瘤裂痕がみられる。平面形状は横長で、表面の下端部に原礫面が残る。表面の剥離面構成は中央部に向かう求心的な剥離が行われ、一部に階段状剥離がみられる。側面形状は直線的である。中心部の厚みを除去するために剥離された可能性がある。石材は凝灰岩である。

以上のように、それぞれの石器の詳細を述べた。ここでは本資料からわかる点をまとめる。

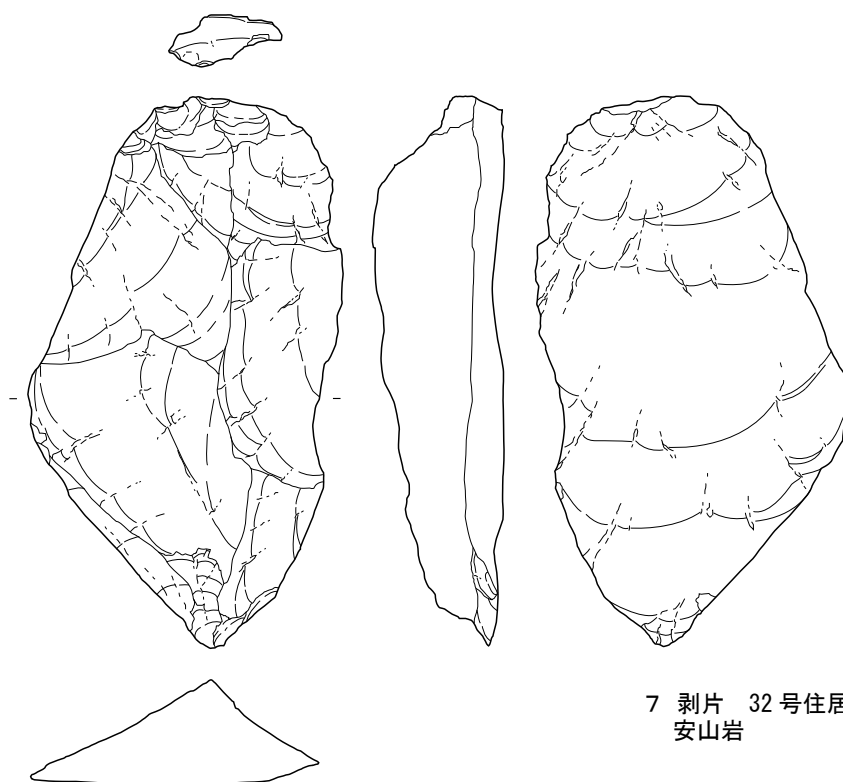
①安山岩による尖頭器生産

1、2は良質な安山岩を用いたもので、板状の剥片を素材としていることがわかり、1の尖頭器未製品からは折取面があることから、面的な剥離を繰り返す前に素材形状の調整があったことが指摘できる。2の尖頭器未製品では右側面には直線的な側縁が形成されており、尖頭器生産の意志がうかがえるが、左側縁に原礫面と剥離面が残置しており、これらの除去が困難であったために尖頭製作を断念したことが推測される。つまり原礫面や折取面などの厚みが残る部分は面的な剥離を行う際に障害となった可能性がある（註1）。

以上の点から、板状素材を利用した尖頭器生産の様相が推測できる。尖頭器生産に関し、原産地と消費地では作業内容の差異が指摘されており（島田1994）、素材形状がある程度まで推測できる本資料は貴重である。山王平遺跡へ完成品およびブランクではなく、板状の安山岩

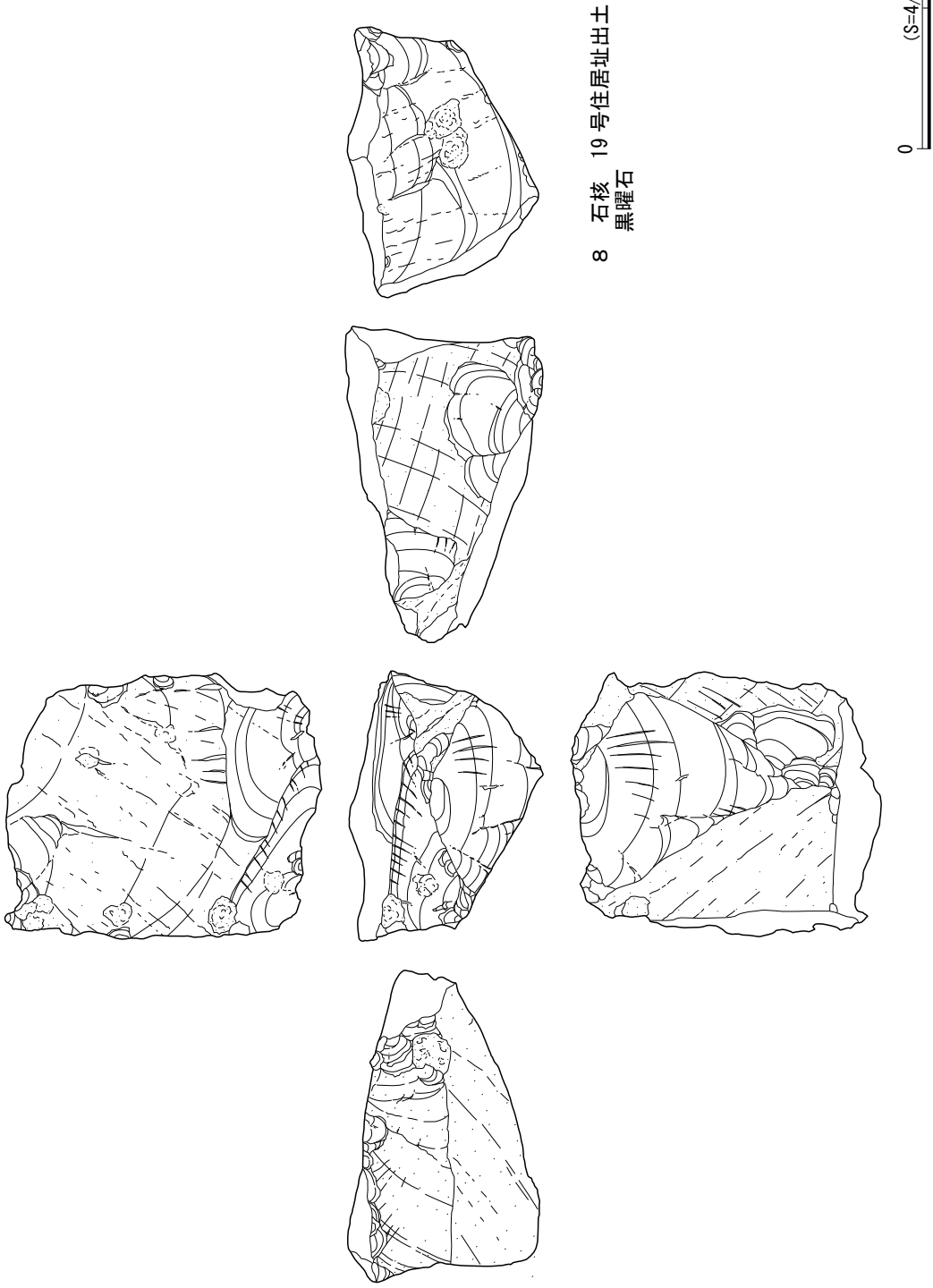


6 加工痕ある剥片 8号住居址出土
ホルンフェルス



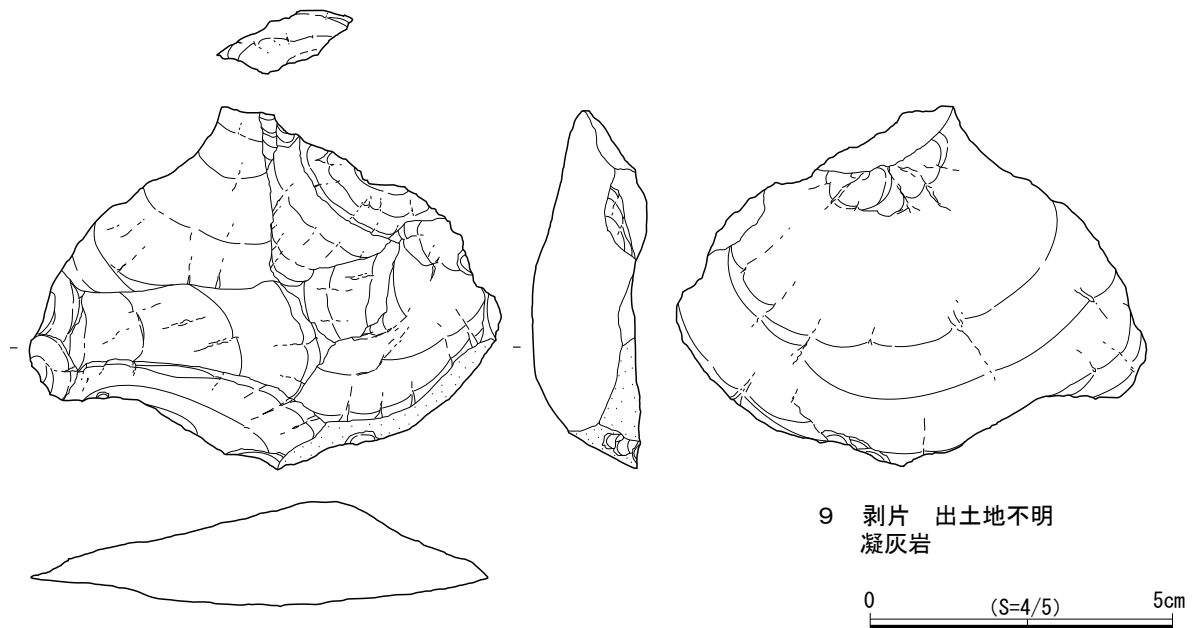
7 剥片 32号住居址出土
安山岩

0 (S=4/5) 5cm



8 石核 19号住居址出土
黑曜石

第6図 石器（縄文住居址出土）



第7図 石器（出土地不明）

第1表 石器属性表

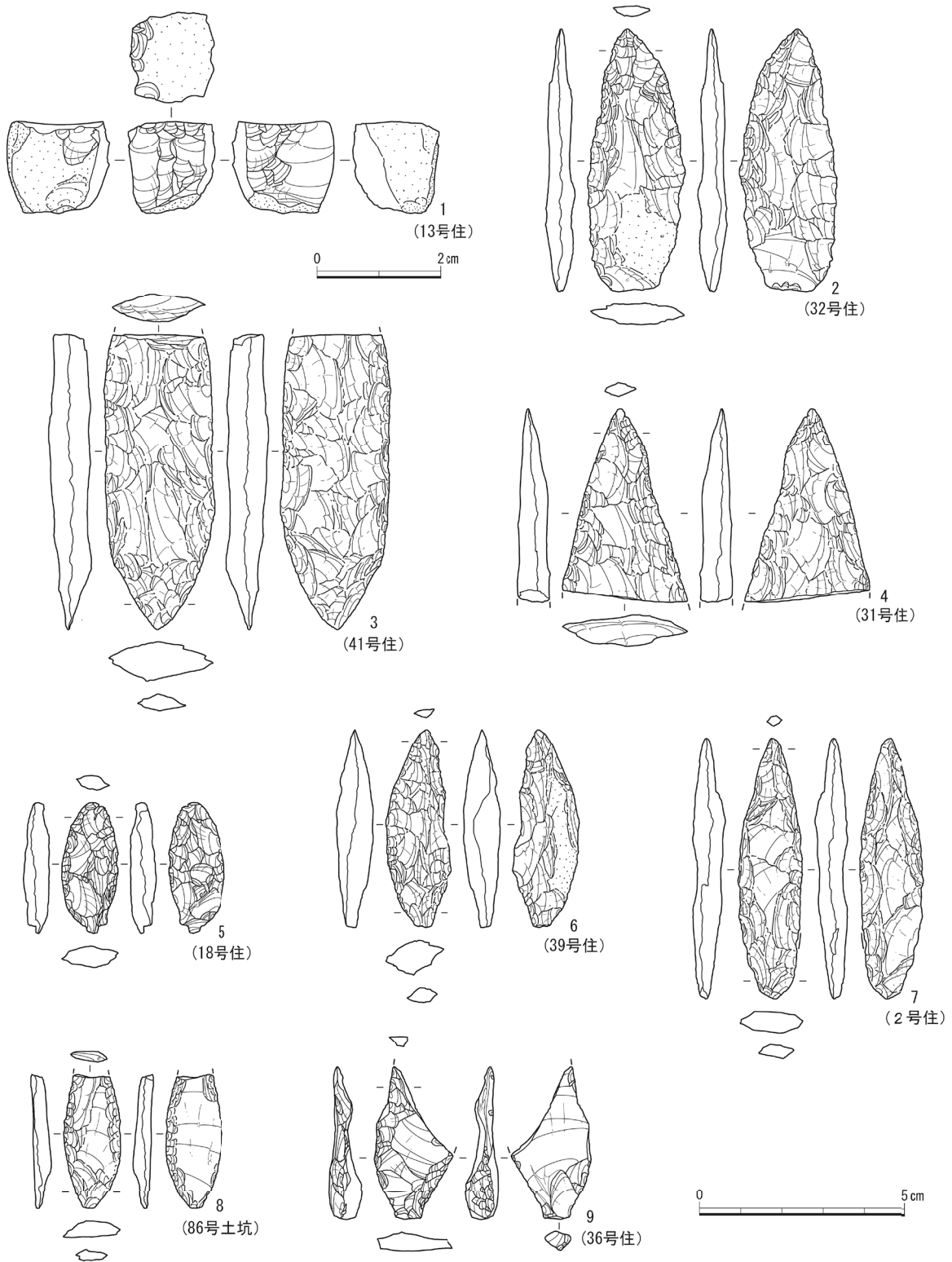
図面No.	出土位置	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	表土	尖頭器未製品	安山岩	165.5	39.4	12.5	73.3	両端部に原礫面残置
2	表土	尖頭器未製品	安山岩	(71.3)	38.2	12.4	53.2	左側面に原礫面残置
3	表土	尖頭器	安山岩	(41.5)	20.7	8.5	10.6	
4	3号住居址	尖頭器未製品	安山岩	51.0	42.1	12.7	24.2	ビット3出土
5	32号住居址	スクレイパー	メノウ	74.5	47.2	13.1	39.3	表面に原礫面一部残置
6	8号住居址	加工痕のある剥片	ホルンフェルス	79.3	37.8	14.0	53.5	表面に原礫面残置
7	32号住居址	剥片	安山岩	90.1	50.4	19.3	61.2	
8	19号住居址	石核	黒曜石	58.4	49.6	34.9	97.6	角礫素材、節理面残置
9	不明	剥片	凝灰岩	59.7	77.6	15.8	60.8	表面に原礫面一部残置

剥片を搬入したことが指摘できる。その時期は表土採集のため明瞭な時期は特定できず、本市の尖頭器石器群に注目すると L1H～FB 層相当の可能性が考えられる。なお、山王平遺跡発掘調査報告書 旧石器時代編では、縄文時代の遺構から出土した旧石器時代資料について記載がされている（麻生・相原前掲、第8・9図）。ここでは複数の時期に及ぶと推定される尖頭器7点が縄文時代の住居址から出土しており、基部がV字状を呈する薄出の尖頭器が1点あり（第8図3）、注目される。それ以外の尖頭器については調整加工の差はあるものの、主たる石材が安山岩であることは共通する。先述したように、山王平遺跡の旧石器時代調査は、開発深度との兼ね合いから部分的な調査となっており、尖頭器石器群が調査区外のB1層より上層に存在していた可能性を示唆するものである（註2）。

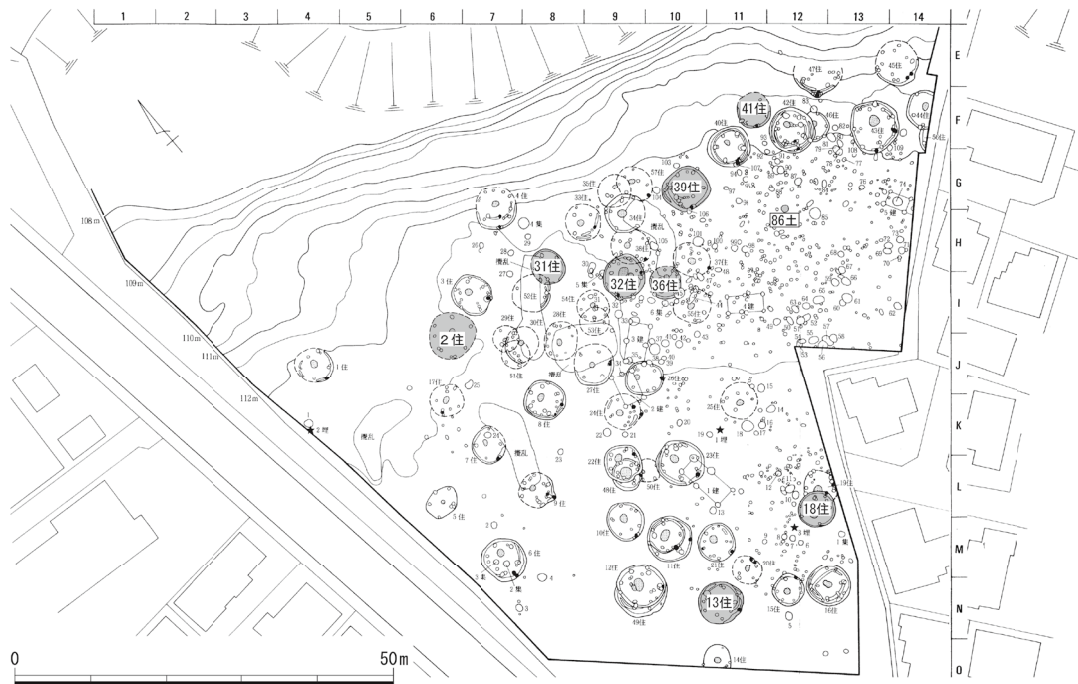
②境川流域における縄文時代の黒曜石利用

先述したように、19号住居址からは信州系と推測した黒曜石製の石核が出土した。19号住居址構築時の床面がローム層を削っている点から、旧石器時代の所産である可能性は完全に除去できないが、ここでは縄文時代のものとして所見をまとめる。まず19号住居址は調査区の南に位置し、東側の一部が調査区外である。18号住居址と切り合いがあり、本住居址のほうが新しい（第10図）。埋甕が2基確認されており、埋甕aは加曽利E式（新戸・原山型土器）、埋甕bは加曽利E3新式に比定された（戸田・麻生ほか 前掲）。このことから住居址の時期は中期後葉と捉えられる。

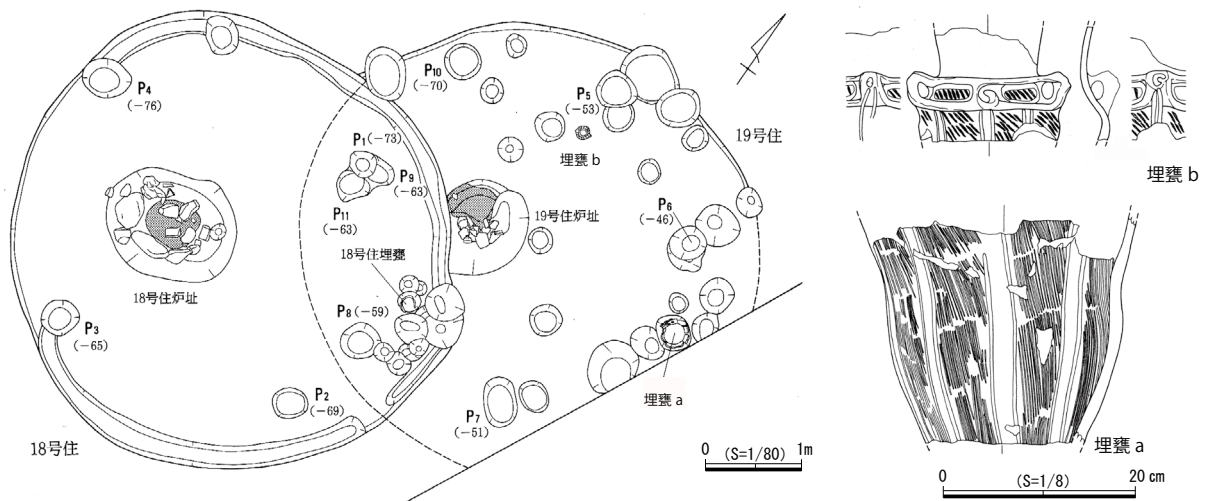
縄文時代中期における相模原市での黒曜石利用については、河本雅人（2007）および中川真人（2021）による論考がある。相模原市における中期の黒曜石利用の産地



第8図 縄文住居出土の旧石器



第9図 旧石器時代の石器が出土した縄文住居址



第10図 19号住居址と埋葬

変化について重要な指摘があることから、その概要を示す。

河本雅人は当館研究報告第29集において、下溝遺跡群における住居址出土土器から石鏃に注目し、その産地の変化を土器形式から素描した。これは考古企画展による資料調査によるもので、分析結果とその評価をまとめて

いる。分析の視点として、当麻・下溝遺跡群の上中丸遺跡、下原遺跡を対象遺跡に設定し、土器型式の変遷をⅠ～Ⅳ期まで区分した。そしてそれぞれの段階において、住居址内出土の石鏃合計163点を産地推定の対象として抽出し、蛍光X線にて産地推定分析を行った。その結果、神

津島恩馳島産、諏訪星ヶ台産黒曜石の比率が特に多く、さらに時期的な差異があることを明らかにした。具体的にはⅢ期とされた加曽利E式・曽利式に連弧文土器が伴う段階では神津島恩馳島産よりも、諏訪星ヶ台産が優勢になる点を指摘した。そしてⅢ期には加曽利E式と曽利式土器の折衷がみられることから、曽利系文化が南関東に波及し、それに伴い諏訪星ヶ台産の黒曜石も集落内にもたらされたと解釈した。またこのⅢ期以降、集落内での石鏃点数が増加し、かつ石鏃自体の重量が軽くなる点から、集中的な石鏃製作があったとする。

中川真人は、川尻中村遺跡第5地点の住居から出土した重さ約1.6kgの黒曜石石核に注目し、パレオ・ラボの竹原弘展へ蛍光X線による産地分析を依頼し、分析結果は神津島恩馳島産であった。この分析をもとに、相模川流域に展開する上中丸遺跡、下原遺跡、当麻遺跡、川尻遺跡など、出土した黒曜石の産地推定分析が行われている21遺跡を対象にし、中期前葉～中葉、中期後葉、後期前半・晩期中葉の時期において黒曜石の産地比率を提示した。その結果、中期前葉～中葉では神津島系が主体であり、中期後葉では中部高地系が主体となる。そしてその傾向は後期前半・晩期中葉でも同様である。また、川尻遺跡では上記の産地傾向とは差があり、中期中葉でも神津島恩馳島が60%ほど、後期前半でも同様の傾向を示す点を指摘し、同遺跡の原石・石核の保有数が周辺遺跡よりも多い点から、川尻遺跡を黒曜石原料を供給する中継地として評価した。

以上のように、相模川流域や、当麻・下溝遺跡群での黒曜石利用の状況について、研究成果をまとめた。縄文時代中期～後期にかけて、神津島産と信州産黒曜石についてその利用率が異なる点が明らかにされている。そこで本稿では、先述した山王平遺跡の黒曜石製石核について山王平遺跡が位置する境川流域の遺跡をもとに遺棄された黒曜石製石核の形状について、若干の考察を行う。

対象遺跡は、山王平遺跡に加えて、橋本遺跡（大貫・土井ほか1986）、下森鹿島遺跡（河合・坪田ほか2020）である。両遺跡ともに縄文時代中期後葉を主とする遺跡で、環状集落を形成している。両遺跡の詳細は紙数の都合上省略する。本稿では図版掲載されている住居内出土の黒曜石製石核を図示した（第11図）。いずれも中期後葉の住居址出土のもので、産地推定は長澤の肉眼による。本来ならば、非掲載の黒曜石製石器群の中から石核を抽出すべきであるが、時間の制約上、図版掲載を対象とした（註3）。

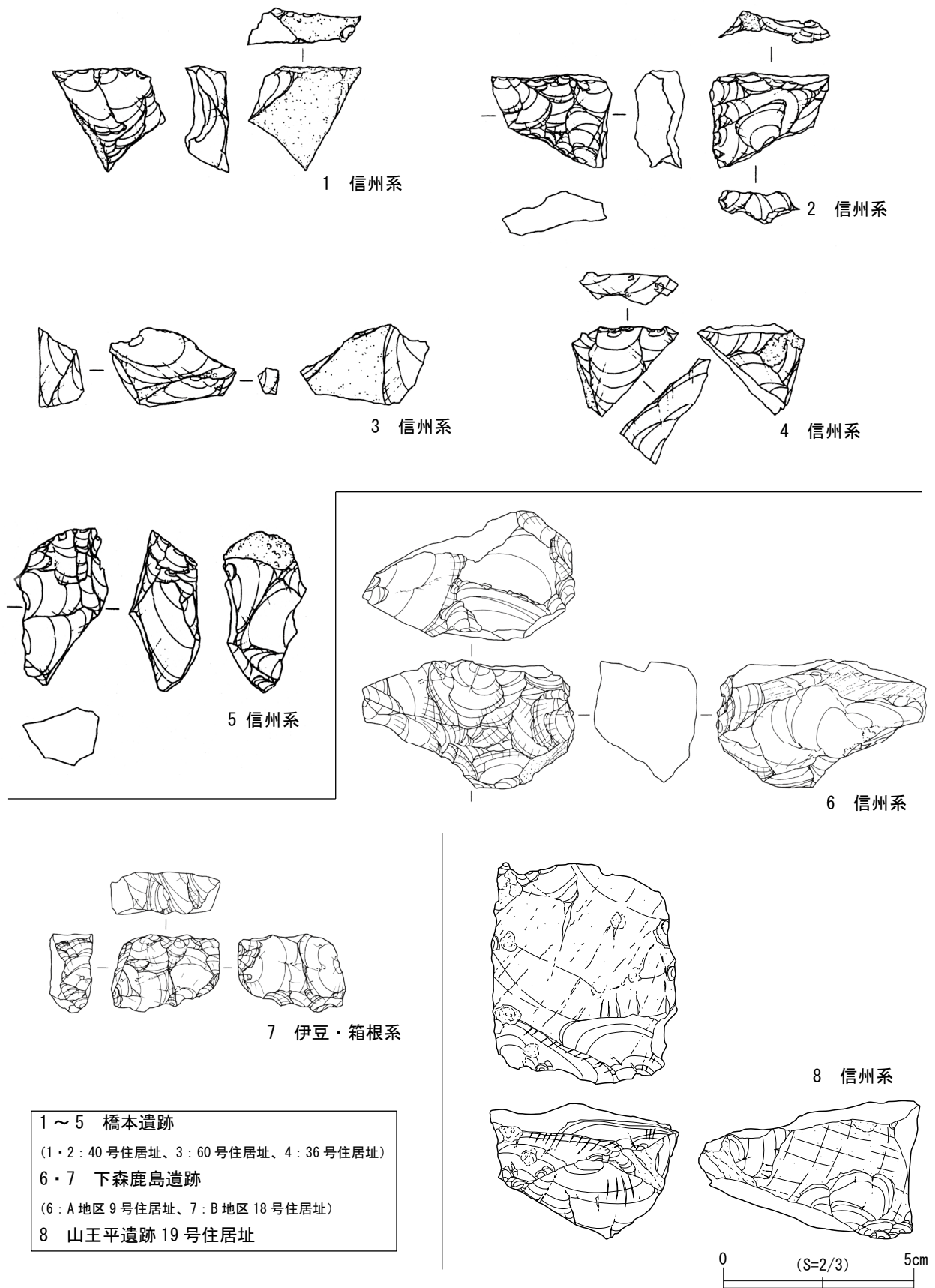
第11図の1～5は橋本遺跡の住居内出土のものである。いずれも斑晶が微量含まれ、透明度が高い点から信

州系と考えられる。板状になるまで入念に剥片類が剥ぎ取られており、重点的な石材消費がうかがえる。1、3のように大きく礫面を残すものがあり、おそらくは礫面の除去を行うと石核のサイズがより小さくなってしまうため、意図的に残した可能性が考えられる。4も裏面上端に礫面が残置しており、直接打撃の打撃痕跡がみられる。打面の設定は、1のように打面転移を行わないものや、4のように頻繁に行うものなどがある。2は縁辺につぶれが多くみられ、長軸、短軸ともに加撃軸がそろった階段状剥離があることから、両極打撃によるものと推測される。その他の石核には同様の痕跡はみられない。つまり両極打撃と直接打撃が存在したと考えられる。

6、7は下森鹿島遺跡出土のものである。6は斑晶がかなり乏しく、透明度が高いことから信州系と判断した。赤茶色の縞が混ざる（註4）。同様の特徴は橋本遺跡の2にもみられる。他の遺跡と比較すると大振りで肉厚なもので、裏面に一部帯状に原礫面が残置している。打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行い、その結果、階段状剥離が多くなった時点で遺棄したと考えられる。縁辺のつぶれや加撃軸が揃った階段状剥離は確認できず、直接打撃によるものと推定される。7は板状を呈するもので、左右両側縁および上下に加撃軸がそろった剥離が確認できる。縁辺につぶれがみられ、両極打撃による残核と考えられる。1mm以下の白い斑晶が少量含まれ、透明度が乏しく光沢がやや強い点から、伊豆箱根系と判断した（註5）。

以上、黒曜石製石核の様子から、直接打撃によるものと、両極打撃によるものの2種類が確認できた。小形の石核は剥離面の大きさから、日常的な刃器や小形石鏃の素材として使用された可能性がある。また、6、8のように他の石核よりも大ぶりなものも確認された。これは遺跡内の黒曜石の搬入形態が複数あった可能性がある。つまり、①原石・石核、②分割された剥片、③石鏃完成品、の3種類が考えられる。製作にかかるコストを考えると、石鏃完成品が最も高く、原石・石核が最も低い。山王平遺跡の石核は、ある程度の大きさの剥離面が少ない点から、原石・石核段階の搬入を示す事例と評価でき、遺跡内での石核消費を意図していたことがわかる。しかし、石鏃の素材か、日常的な刃器の素材かは不明である。

そして、橋本遺跡の資料には原礫面が残るものや、折取面が確認できることから原石・石核の分割があった可能性がある。石核の多様な形状は、旧石器時代の石刃技法のように定形的な剥片剥離を行うようなものではなく、素材形状に強く左右されながら、一定の大きさの剥片が取れば十分であるかのような剥片剥離が想起される。



第 11 図 境川流域の縄文中期住居址出土の黒曜石製石核址

おわりに

本稿では山王平遺跡の追加資料をまとめ、若干の考察を行った。以下に内容をまとめる。

・表土採集資料や、縄文時代住居出土の尖頭器から、安山岩製の尖頭器生産があったことが指摘でき、さらに遺跡内へ板状の安山岩が素材として搬入されたことが推測される。その時期については採集資料が中心であることから明言はできないが、L1H～FB層相当の可能性が考えられる。

・境川流域の縄文時代中期後葉の3遺跡を対象に、住居内出土の黒曜石製石核の形状から2種類の剥片剥離技術を指摘し、さらに遺跡内に搬入される黒曜石の状況を推測した。そして本稿で扱った山王平遺跡の黒曜石製石核を原石・石核段階での搬入品と評価した。

縄文時代中期における黒曜石の利用は、産地推定分析により、黒曜石の産地付近の集落とそれと離れた地域の交流を明らかにした。一方で、集落内での黒曜石は何に使われたのか、より具体的に提示できれば、当時の石器を用いた生活の様相が明らかにできると考えている。今回は時間の制約上、非掲載資料を含めた検討は行えておらず、今後の課題である。特に両極打撃による残核は、肉厚な剥片と認識される場合も考えられ、丹念な資料調査が求められる。

相模原市では発掘調査が終了し、報告書が刊行された後に当館へ移管を受けている。過去の調査成果や周辺遺跡との関連性を把握しながら、遺跡に関する展示や講座、現地での解説を行い、遺跡が記録保存されたその意義を広く伝える。考古担当学芸員の存在意義はここにある。本稿は山王平遺跡における追加の石器資料について、どこまで情報を引き出せるか試みたものである。

註1 岩宿博物館学芸員 鈴木秋平氏のご教示による。

註2 玉川文化財研究所主任調査員 麻生順司氏のご教示による。

註3 報告書の記載によると、石核が出土した住居址は12号住居址があり、図版には掲載されていない。実物を確認すると円礫素材のホルンフェルスのもので、剥片を数点剥離している。しかし、住居出土の黒曜石剥片類の中に石核が入っている可能性も考えられ、住居内出土石器の組成を再点検する必要がある。さらに山王平遺跡は本稿でもふれたように環状集落の東が未調査部分であることから、

調査区外にも未発見の黒曜石製石核の存在が予測される。

註4 この赤茶色の縞が入り込む黒曜石について、当館資料の全体的な調査は実施しておらず印象論となってしまうが、旧石器時代の黒曜石製石器群でも使用されている。一例として田名塩田遺跡群のA地区 No.2 地点1号ブロックから出土している(迫・麻生・橋本1999)。原石の大きさまで復元できる接合資料で縦長剥片を連続的に剥離しており、黒曜石の産地推定分析では信州和田峠産と判定された(バリノ・サーヴェイ株式会社1999)。

註5 伊豆・箱根系黒曜石は中期後葉ではごくわずかに利用されており、後期前半でやや増加する傾向が指摘されている(中川2021)。相模原市の当麻芹沢遺跡では後期と推測される黒曜石原石が出土しており、産地推定分析の結果は伊豆柏峠産であった(竹原2015)。今回の下森鹿島遺跡の事例とあわせて伊豆・箱根系黒曜石の利用がうかがえる資料として注目される。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、玉川文化財研究所代表取締役社長 相原俊夫氏、同研究所主任調査員麻生順司氏には資料報告に関しご快諾いただき、資料の所見についても懇切丁寧にご教示いただいた。そして次の諸氏には石材、石器器種などの有益なご指導・ご助言を賜った。ここに感謝の意を表する次第です。(順不同・敬称略)。なお、石器の記載やその評価についての責任は長澤にある。

白石浩之 鈴木次郎 小池 聡 御堂島 正 中山 豊
鈴木秋平

引用・参考文献

- 麻生順司・相原俊夫 2021『山王平遺跡発掘調査報告書—旧石器時代編—』玉川文化財研究所
- 大貫英明・土井永好ほか 1986『橋本遺跡 縄文時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 河合英夫・坪田弘子ほか 2020『下森鹿島遺跡群発掘調査報告書—A・B・C区の調査—』玉川文化財研究所
- 河本雅人 2007「上中丸・下原遺跡における縄文時代中期の集落変遷と石鏃に使用された黒曜石の産地推移について」『相模原市立博物館研究報告 第16集』相模原市立博物館
- 河本雅人・川本真由美ほか 2005『古淵B遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書』相模原市立博物館考古資料調査報告書

- 金山喜昭・土井永好ほか 1984『橋本遺跡 先土器時代編』
相模原市橋本遺跡調査会
- 迫 和幸・麻生順司・橋本真紀夫 1999『田名塩田遺跡群
I 発掘調査報告書』田名塩田遺跡群発掘調査団
- 島田和高 1994「両面調整槍先形尖頭器の製作と原材消費
の構成」『旧石器考古学』49 旧石器文化談話会
- 関塚英一・松井泉ほか 1990『古淵 B 遺跡—都市計画道路
古淵麻溝台線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書—』相模原市古淵 B 遺跡発掘調査団
- 竹原弘展 2015「第Ⅵ章第 1 節 縄文時代遺物包含層から
出土した黒曜石の産地推定」『当麻芹沢遺跡—剣道 52
号線（相模原町田）道路改良事業に伴う発掘調査—』
相模原市埋蔵文化財調査報告 47
- 戸田哲也 1998「第Ⅳ章 まとめ」『山王平遺跡発掘調査報
告書 —縄文時代編—』淵野辺山王平遺跡発掘調査
団
- 戸田哲也・麻生順司ほか 1998『山王平遺跡発掘調査報告
書 —縄文時代編—』淵野辺山王平遺跡発掘調査団
- 中川真人・竹原弘展 2021「交錯する海と山の黒—相模川
流域における縄文時代の黒曜石の利用と流通—」『相
模原市立博物館研究報告 第 29 集』相模原市立博物
館
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1999「第Ⅵ省 自然科学分
析 第 3 節 向原遺跡 No.1・2・3 地点出土黒曜石の
産地推定」『田名塩田遺跡群 I 発掘調査報告書』田
名塩田遺跡群発掘調査団
- 町田 洋 2009「第 4 章 相模川がつくった段丘の地形と地
質 第 2 節 関東ローム層：その形成年代と環境」『相
模原市史 自然編』
- 山本暉久 2012「第 3 章 縄文時代 第 3 節 主要な遺跡
山王平遺跡（No.58 遺跡）」『相模原市史 考古編』

挿図

- 第 1、2、8・9 図：麻生・相原 2021 より引用
第 3～7 図：長澤作成
第 10 図：戸田・麻生 1998 より引用、一部改変
第 11 図：大貫・土井ほか 1986、河合・坪田ほか 2020
より引用



S=2/3